

# 同人作品

信濃早春譜 秋山義仁

甘なのか渋々なのか残り柿枯野に立つ小さな太陽

諏訪湖沿い深き湯舟の片倉館明治にあった利益還元

上諏訪のそこにあるもの御柱凜として生けるが如く立つ  
オンバシラ

下諏訪の下社秋宮御柱天に突き出すこぶしは叫び  
シモ

見知らぬ人の庭を賞す松本の城下町歩き三時間

桐の葉は色付き雪まとい散る人は落葉踏まず遠回り

寛政に彫られた穂高の道祖人は夫婦手を取り合い大地を拓く

鬼火さえ灯りを減らしテンテンと姥捨超えず今帰路につく  
オバステ

冬だから黒部の山は刃を白く雪の魔物を切りさきさざむ

糸魚川の雪は低くビューンビューンと音はすれども海街見えず

読み書き句作り一茶弾きの毛虫義母と争い家田を二分

あの一茶妻めとり子を成して終のすみかは土蔵の中か

夕暮に烏何故鳴く善光寺閨におされて深くおまいり

里外れ冬枯れ薄は婆々に化けむか之の爺に手取られ帰る

新芽達あれよあれよと空の中そんな日の午後に私は逝きたい

ピンクの絨毯 石邊綾子

ティファニーで朝食そんなワンシーンを真似た昔のドレスが細い

まつくろな知識が詰まった目と脳を今朝の涙が洗い流して

ひとしきり騒いだあとのむなしさを覆い隠してピンクの絨毯

春を待つ 井上省吾

メモをして買物出掛け店内を歩き回って品定めする

最近セルフレジが多くあり苦手な我は普通のレジへ

書き止めて買物へ行き品選び台車押して店内回る

先の事待つのは長く感じるが過ぎてしまえばほんのひととき

ひとときの一つ一つを大切に気持ちをこめて喜びを得る

寒い日と暖かい日を繰返し季節は進み春は間近に

水仙と梅の花咲き春近く我家の庭は輝いて見え

庭に咲く水仙の花切り取りて部屋に飾って香り楽しむ

寒暖差繰返しゆくこの季節体いたわりうまく乗切る

寒椿一本の木に三色の八重の花弁みごとに咲いた

ぼけの木に花芽をつけて開花待つ色とりどりの小さな蕾

種いもを買って揃えて出番待つ雨が上がれば植えつけをする

無農薬野菜を育て安心でそれが自慢の我が家の野菜

春間近畑の草も伸びてくる汗をかきかき忙がしくなる

鍬を持ち体動かし汗をかき畑仕事を楽しんでいる

自らが喜んでやる何事も疲れ知らずで時間忘れる

寒い日は暖かい日を思い出し早くこぬかと心待ちする

梅も咲き春が来る日もすぐそこに待ちわびている我ここに居る

陽の当る窓辺に寄りて暖をとる太陽の熱有難きかな

半日をテレビをつけてひと休み無駄ではないといいきかせつつ

花開く春は未だかと待ちわびる寒い日もありも少し先か

寒さにも花芽作って待っている草木を見ては勇気をもらう

ふきのとう今年は一つ食べただけ後日見たのは花開きあと

二月末寒さ厳しく厚着して花の様子を見に外へ出る  
すばらしき朝を迎えて有難く気付いたことを残らずこなす

### 幸せ

月残る初春の朝戸を開き西の空見てしばし見とれる  
室内の家具移動して配置変え気持ちも新たな心も軽く  
片付をしようと思ひ始めたが思ひ出多く進みが遅い  
アルバムを出して開いて整理する処分出来ず時間だけ過ぎ  
幼き日われ写ってる一枚の写真を見て思ひ新たに  
日の出前月未だ残る西の空ここちよい風ホホを撫でゆく  
開花待ち幾日も過ぎその日来た気温も上り満開近く  
桜咲き三月終りピカピカの一年生の可愛い姿  
冬日から春飛び越えて夏の日にあわてて咲いた桜の花も

八時半ごはんも済んでひと休みこの後のこと草取りするか  
希望持ち目的持ってひたすらにひとつひとつに心をこめて  
ひとめ見て何んて綺麗な花だろう感じる人は幸せな人  
雨の日も曇りもあれば晴れる日も全て喜び楽しく暮す  
まず一步踏出してこそ喜びがついて来るので歩いていこう  
桃の花梨の花咲く畑には雨降り続き木々は喜ぶ  
モップ手にベランダへ出て拭掃除雨水使い汚れ拭きとる  
蕎麦を茹で昼の御飯は肉そばを生玉入れ七味を少し  
春らしく気温も上り目に青葉雨の滴がなお鮮やかに  
やわらかく木々の緑が目に見る春の初めのやさしい雨が  
黒雲が空を被いて雨も降り外へ出るのは控え目にする

## 夢のような人生

悲しくて泣いた日もある若い頃思えば全て夢見てるよう  
こんなことあんなことなど思い出し楽しい事も苦しい事も  
若い頃思い出しては反省も戻る事ない過去の思い出  
振り返り子供の頃の楽しい日魚おいかけ川かけ回る  
転々と住まいが変りふる里と呼べるとこなき過去振り返る  
過ぎし日の思い出浮かぶスクリーンせわしく動く頭の中で  
夢を持ち先を見つめて希望持ちただひたすらに体動かす  
夢のごといろんな事があつた過去写し出し見る我がスクリーンに  
今はただ夢の続きを進みたい未知の世界を手さぐりでいく  
この道はどんな山あり谷があるしっかり見つめ夢の続きを

桜の花 甲村雅俊

底抜けの雨降り止まぬさびしさに自分を信じ法を信じる  
三年前われの愛しき黒猫の苦しみ耐ふる臨終を悔ゆ  
様々なこと思ひ出す桜ゆゑ迷ひながらも目に焼き付ける  
呑川はさらさら流る安らかに桜の花を浮かべて行くよ  
窓外を眺める猫の横顔のすがしくて見とれてしまふ  
背を揃へ瓶に活けたりすやすやと眠れる人へ花首向けて  
言ひ知れぬ薄気味悪さ覚えたり睡眠薬を飲む人たちに  
氣象庁のひと神妙に発表すやはり今年も暑くなるらし  
夏になる前のせせらぎ呑川はまだすすしげに流れてゐたり

夏までに

引つ越しをあれこれ悩みゐたりしが夏までここで我慢しやうか

夏までにやらねばならぬことあれば息とめて水に潜れるごとく  
豪姫と仲良くなれば毛を梳きて朝のひととき親しく過す

キジ白の豪姫さんの元親は今ごろ何をしてをられるか  
カーテンが風に揺れたり昨年夏空をふとわが思ふとき

飼ひ猫が少し肥えたり中年は太めでよろし生き物は皆

噛み癖を直せと言ふも伝はず猫にガブつと噛まれてをりぬ

飼ひ猫がわがしはぶきに鳴き声で応へるただのしはぶきなのに

飼ひ猫にワクチン接種受けさせる人間の吾が受けぬワクチン

### 子育て

背後から鳥が飛んできてわれの頭上でバササ羽ばたきしたる

近所にて子育て中かピリピリと神経質なカラスの威嚇

あちこちで巣作りはげむ鳥たちがいのち育む小満の節

気が付くと吾の事務所のベランダで鳩が子育てしてをりあはれ  
飼ひ猫とわれは別種であるけれど次の世代を持たざる同士  
次々と生まれては死ぬ生き物の目指すところは子孫繁栄  
人類をどうするために生れたか消え残りたるコロナウイルス  
じわじわと心の闇を片隅へ押し遣るごとく日の出早まる  
あたらしき家族むかへる相談を豪姫として結論は出ず  
わが齢おもへばリミット近づきぬ長命の猫あらたに得るは

白粥 氷室敬子

短歌とは肉体に溜まったへドロであるそのまま食べれば美味しくて  
料理すればそれなりの一品ができるそれが短歌の力である  
白粥はつくづく白く煮つめられ病み人の病癒さんとす

白粥は病む人の身に入り込み何がっらいか聞き出している  
歌人とは直前まで歌を思いいるかずとずっと思うまま死ぬのか  
朝明けを夕日と想着て朝の食事を金曜日の夕日を受けて食べていた

白い景色 本田洋子

如月の六日大雪積もりけり雀も飛ばずお芋を煮よう  
ザザザッザザスコップ片手に人影動く校門付近の除雪する人  
雪中を傘もささずに急ぎ行く人の肩にも雪は積もりぬ  
雪止みて白い世界に赤い実の稔る木一本鶉が群れ  
鶉に吾がパンジーは喰われけり見事な花もその茎までも

弥生

吾が心厚いコートを脱げなくて春の息吹きを遠ざけて居り

一日を誰れとも話すこともなく布団に入るしわがればーば  
年を経て暑さが身に沁みる調度良き時少なりけり  
お彼岸にぼた餅ならぬ墓石を吾れのお腹に置きしご先祖  
彼の人は身を粉にしてぞ人助け頭が下がる仏の子ゆえ  
人知れず咲いて居りぬるフリージア団地の庭の隅に毎年  
横浜の花は僅かに遅れけりいよよ薄紅に匂いけるかな  
満開の桜の下に立ちてみむひとひらとても散らす風無し  
赤々と陽は登りけり三月の終わりに聴きし鶯の声  
この匂い頭の上から垂れてくる優雅な花房藤の花なり  
なたねつゆ墓前に花を姪たちと 父母兄弟の眠るお墓に

老後を生きる 丸山光

父親に背を向けたけど背くこと一度もなきを父は知りしか  
少しづつ共通点を失って子から孫へとわたしが消える

あなたがいればそれでいいいつの間あなたがお前と呼称が変わる  
死ぬガンと死なないガンとの分岐点生きる支えのキミがいたから  
がんばって頑張りすぎずにがんばって訳の分からぬメールを送る  
散歩するいつものコースに倍かかる引退すべきと天よりの声

マフラーを初めてキミに貰った日キミとは誰かと妻の詰問

しまむらで下着を買うなど言ったのに空にひらひら妻のデカパン  
恥ずかしく下を向きつつ結果聞く理事長戦に一票はいる

もしかしてもしかしてねの人生がありましたかそりやありましたよ  
寒ければ少し近づき暑ければかなり離れる老後の二人

古書店の主人のごとく囲まれて眺めるだけの豊かな老後  
戦争も仕方がないと言うサタンわが内に住む終戦の日に  
吐瀉物を身に浴びながら抱きつづけ心配そうに吾子を見つめる  
お互いに銃口を向け対峙する平和を守り平和をこわす  
創造の神のみ業を見るごとく私の植えたナスに実がなる  
昼食を準備す妻の口笛に呼ばれるまでは下に行かない  
最近はあるあなた呼ばれること多く私はきみの父ではないか  
試合前言ってし待って後悔す負けていいから頑張りなさい  
孫たちに援助交際求められハーゲンダッツと一緒に食べる  
くれるなら何も言わずにくださいな一言多い娘の態度  
見られても一本脚で立ち続けお前もできるかやってみると鷺  
孫どもにじいじイジと呼ばれても父の日なれば娘より花

停戦を促す力失ってサンタは嘆くクリスマス・イブ

昨夜からこころ騒がすことありて人を赦せぬ自分を嘆く

甚大な被害もたらす災害にむなしい言葉祈っています

糖尿に網膜剥離・大腸ガン奇妙で不思議な三位一体

神様に任せっきりのさ庭にはとなり家の勢いあらず

### ささやかな気付き

格安の航空会社のカウンターここまでおいでと片隅にある

喜寿までに老後資金は先細り今のうちから病氣しておく

古希すぎて今さら気づいて嘆いても遅いけれども私はバカだ

間違った思い出だけか歩き出し真実・事実が一緒になりぬ

突き出した手よりも高く水しぶき水面をたたく勝者の右手

赦されて日々生きるゆえ終活はあとは頼むの言葉でたりる